歌舞練場「令和の大改修」

都をどり「本来の形」

今回、「令和の大改修」を終えて新装開場する祇園甲部歌舞練場。文化財としての価値を保つため木造和風建築の外観を維持しながら耐震補強するとともに、本館劇場と一体となる技芸学校・小劇場を新築する大規模な改修工事が行われた。都をどりを「本来の形」で再び上演するために関係者が協議を重ね、さまざまな工夫を凝らしている。恒例の都をどりや温習会の会場として使われるほか、新設された小劇場もあわせて、多彩な公演の開催が期待される。

風格ある唐破風の屋根が特徴的な木造平屋建ての玄関棟。公演開催時に入場口、待合として使われる。本館劇場とともに耐震補強が施された

外観維持したまま耐震補強

大正時代に建てられた歌舞練場は2014年に行った耐震診断で、震度6強の地震で倒壊の恐れがあると判明した。16年10月に行われた温習会を最後に休館し、祇園甲部歌舞会などが建て替えを含めて検討を進めたが、祇園町のシンボルである和風建築の歌舞練場を守るため、外観を維持したまま耐震補強することが決まった。

工事は国登録有形文化財の本館劇場、玄関棟を耐震改修し、隣接する祇園女子技芸学校を解体・新築する大規模な事業となった。総事業費は約62億円で、おおきに財団が窓口となって寄付を募り、約8億円が全国や海外から寄せられた。設計・施工は「昭和の大改修」の時と同じ大成建設が担当。同社は1873年の創業以来、社寺の建築や歴史的建造物の保存・再生を手掛けてきた実績があり、今回の「令和の大改修」では、文化財としての価値を維持しながら耐震基準をクリアしなければならないという難易度の高い工事に挑んだ。これほど大規模な木造建築ではほとんど前例がなく、2018年から建築基準法の適用除外申請に向けて検証や協議を重ね、20年6月末にようやく許認可を得ることができた。

本館劇場の工事では、既存の骨組みを解体せずに鉄骨フレームを取り付けて耐震補強するという手間のかかる工法を採用。木製の骨組みには経年変化などによって図面化できないようなひずみやたわみが生じており、それに沿うよう一つずつ計測や計算を重ね、鉄骨を特注したという。さらに舞台上方の天井には背景画や照明をつるすためのパイプ状の美術バトンが約15チセン間隔で並んでおり、演出の妨げとならないよう、バトンの本数を維持したまま鉄骨を設置するためミリ単位の調整を重ねた。

本館劇場の北東側(写真左上)に直結してL字型に校舎を新築。隣接する敷地(左下)では弥栄会館をホテルに改装する工事が進む(昨年12月撮影)＝小型無人機から

舞台裏側の天井。木製の梁に鉄骨が取り付けられている

建物の外観はもちろん、舞台や客席も大正・昭和の趣を残し、以前の姿のまま再現されている。女性の舞い手が主体となる祇園甲部の公演は、同歌舞練場の上下が短く奥行のある舞台の特色を生かして上演されてきた。特に舞台上手と下手に備えられた花道は、都をどりの冒頭、掛け声に合わせて舞い手が登場する印象的な演出に欠かせない。改修工事中に都をどりを開催していた他の会場では、花道が1本しかなかったが、歌舞練場の花道が元通りになったことで旧来と同じ演出が可能になった。両花道の外側にある桟敷席では、芸妓・舞妓が唄や三味線、鳴り物を生演奏する。

内装にも可能な限り元の部材が生かされている。花道の欄干や飾り金具といったパーツの一つ一つが取り外されて大切に保管され、工事後、元の位置に戻された。天井も改修前と同じく、寺院建築などにも用いられ格調高い様式である格天井に仕上げられている。天井の中央にはつなぎ団子の紋章をあしらった提灯型の照明が輝く。

花道の飾り金具はそのまま保存され元の位置に戻されている

舞台、花道も元通りに

客席はクッション性のある椅子へと新調され、長時間の公演もより快適に観覧できるように。後ろの席からも見やすいよう舞台正面の席を互い違いに配列する「千鳥配置」を採用し、通路も広く取っている。

大正時代の木造建築

1872年の第1回都をどりは祇園新橋の席亭「松の家」で催されたが、大盛況で手狭になり、翌年以降は建仁寺塔頭旧清住院の建物を改造した旧歌舞練場に会場を移した。現在の歌舞練場は、祇園甲部専用の劇場として1913年に建てられた。本館は総ヒノキ造2階建てで、大屋根をいただいた純和風の大劇場。現役の木造劇場としては国内最大級の規模を誇る。本館劇場と玄関、別館、正門が2001年に国の登録有形文化財に指定された。

建設当時の歌舞練場は、舞台、観覧席(494席)、茶席、貴賓室、事務室などを備え、付属建物も含め総工費56万円との記録が残る。当時最先端の技を誇る大工や宮大工が手がけた。新築を記念して、文人画家・富岡鉄斎の筆による扁額が掲げられている。同じ敷地内に建てられた別館と八坂倶楽部に面して、池泉回遊式庭園も整えられた。

一度目の大規模な改修が行われたのは戦後の1953年。米将兵用のダンスホール付きキャバレーに改装されていたのが祇園甲部に返還された後、「昭和の大改修」によって再び都をどりを上演できるようになった。元の客席は椅子のない平状席だったが、この時に椅子席となり、一部桟敷席が設けられ、鉄骨鉄筋コンクリート造の2階席も増設された。

富岡鉄斎が揮毫した扁額

歌舞練場の建築には多くの人手を要した。木造の骨組みは現在もそのまま残っている

技芸学校と一体化

多様な用途に対応

歌舞練場の耐震改修とあわせて、北側にあった祇園女子技芸学校を解体し、本館劇場と一体となる形で北東側に新築した。同技芸学校は祇園甲部の芸妓・舞妓が舞や三味線、鳴り物、茶道、生け花などを幅広く学ぶ場で、本館劇場の公演の楽屋としても使われる。校舎1階の北西側には荷さばき駐車場と大道具事務室2室を配置し、舞台への搬入時の利便性を高めている。

学校棟内に小劇場も新設。隣接する弥栄会館内にあった「ギオンコーナー」で行われていた京舞や狂言などの公演を引き継いで上演するほか、さまざまな催事の開催にも対応する。

本館劇場、小劇場ともに、芸妓・舞妓の公演に限らず、今後多彩な用途での利用に対応していく予定。祇園甲部組合の杉浦宏和さんは「せっかく新装された舞台なので毎年の都をどりと温習会に使うだけではなく、将来的に長く続けていくためにも、年間を通して公演を行っていくことが大切。庭園や八坂倶楽部といった既存の設備も活用して、いろいろなイベントなどに利用していただきたい」と期待を込める。問い合わせは同組合075(561)1115。

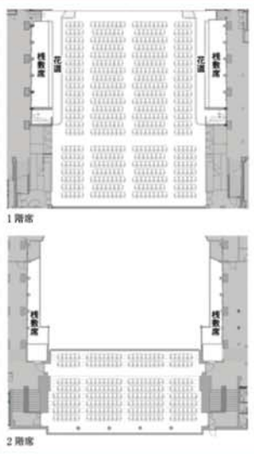
赤を基調とした客席や格天井など、小劇場内部も本館劇場と統一感のある意匠となっている

〈客席図〉

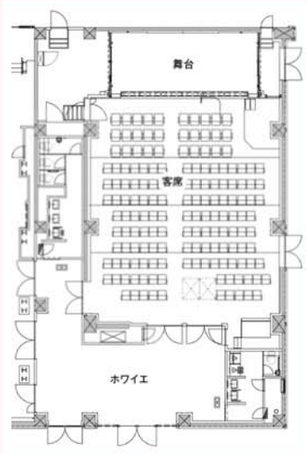
◆本館劇場
1階客席数
椅子席:522席
車椅子使用者区画:5区画
桟敷席:50席
※車椅子を5区画使用した場合、椅子席は14席減
2階客席数
椅子席:216席／桟敷席:34席

◆小劇場
椅子席:165席
車椅子使用者区画:2区画
※車椅子を2区画使用した場合、椅子席は6席減

本館劇場



小劇場



祇園甲部歌舞練場 新開場記念 都をどり特集

2023年秋、
京都髙島屋は、進化します。
2023年秋、京都髙島屋は、専門店ゾーンをオープンします。
百貨店の上質感に専門店の個性をプラスした
“京都髙島屋S.C.”として、新たな一歩を踏み出します。
祇園甲部歌舞練場新開場を
お慶び申しあげます

Takashimaya KYOTO
〒600-8520 京都市下京区四条通河原町西入真町52 TEL 075-221-8811

祇園甲部歌舞練場新開場をお慶び申しあげます。
京都の美しい文化を未来へ。
京都の春の風物詩として海外にもその名を知られる、都をどり。その舞台である祇園甲部歌舞練場が、現在地に新劇場として誕生したのは1913年。奇しくもほぼ同時期の1912年、もとは伏見で創業した大丸京都店が、現在地の四条高倉に3階建てデパート形式の新店舗をオープンしました。
時代が移り変わり、町並みが変わる中で、京都の大切な文化を繋ぎ続けていきたい―。
私たち大丸京都店は、ともに発展することを目的とした活動を継続的に行い、様々な文化催事をはじめ、近年では子供向けの教室やイベント、祇園の町家の保全と活用にも取り組んでいます。
これからも京都の人々とともに、美しい文化を未来へと繋げていきたいと思います。

DAIMARU 京都店
電話(075)211-8111